



TITLE:

花山だより

AUTHOR(S):

CITATION:

花山だより. 天界 1937, 17(194): 310-310

ISSUE DATE:

1937-05-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/167476>

RIGHT:

花 山 だ よ り

□4月19日、花山では第10回研究會が開かれ、小山氏の日食乾板の光度測定の概報あり、稠密な測定の努力に感謝し、次いで、公文氏の時計の精度と測時に關する最近の進歩を聴き、内外の研究所を羨望する。

□4月24日、協會の例會講演會が植物園内で開かれ、京大滑川博士の「大氣の構造」を臺員も集ふて參聽する。地球上層大氣が一種の電離層として、流星現象にも關聯を持ち、大きな疑問符を投げてゐることは等しく注目に値する。——講演終了後、京大氣象特別研究室を見學し、晩春の園内の花壇を愛でつゝ散策した。

□宵空の東天に待たれた火星が、大きな輝きを見せてゐる、紅い魅惑的な光りが、遊星面觀察者ならずとも、我々の眼を誘ふこと空のネオンサインだ。

□皐月の太陽が訪れる頃、花山の山にも白と緑の初夏が色彩を放ち、新緑の中に山つゝじの紅ひが映え、春蟬の合唱隊を誘ふ。

□5月11日は珍しく水星の太陽面經過で、この好機を逸すべからずと、觀測は「内地は駄目」とあつて臺北へ、公文氏の出張觀測となり、同氏は獨りで、去る4日出發渡臺の途についた。

□原子論の泰斗、丁抹のニールス・ボーア博士5月10日入洛あり、この日、京大で「原子論の因果律」なる題下に一世の大論を講じた。その聲咳に接せんと集る者堂に滿つ。——蓋し、ボーア博士の開拓せる新量子論は、全く吾人の抱懷せる物質構造の概念を更新せしめ、又、その鋭い哲學的考察の導入には自ら頭の下がる思ひあらしめる。——世紀の大科學者は、今その業績を説いて初夏の日本に貴き印象を植えて行く。

□新科學の殿堂として、生駒山天文臺は既に建築設計が完成され、目下、内部設備につき協議中であり、これに隣る生駒山天文博物館も同様な歩調を整へて、専門的設備につき考案設計中、夫々將來の研究と活躍が期待される。

(5月11日 花星人記)

